宇治大納言物語の語りと精神

*木村紀子

はじめに

「宇県亜相巧語」（古今著聞集序）などともてはやされながら、その後散佚した宇治大納言物語は、現存宇治拾遺物語の今昔物語集に重なって出る物語群を中心に、その「巧語」の原型が遺っていることを、前稿で検証した。[1] それらと、院政期末に語り加えられたとみられる宇治拾遺物語の第一次拾遺部分とは、一つの物語集の中で一見濃密に融和しながらも、それぞれを群にして読んでみると、おのずから印象に異なりのあることがわかる。その融和感・違和感が何に所以するかを確かめることは、どちらの語りになるのか不明の、主に地下の人々の登場する物語について、その所属を推定し、さらに、大納言物語（以下本稿でのこの呼称は源隆国の語り部分に限定する）と拾遺物語（前稿で大納言源定房に語り手を想定した院政期末拾遺部分に限定する）それぞれの性格を明確にすることにもなるだろう。語り手の境遇や意識や言語環境が近似するとみられながらも、それぞれ生きた時代に限定されつつ現われた言葉の個性を、本稿は、主に無名の人々を語る部分によって、その大半を占める大納言物語を中心に考察したい。テキストは陽明文庫本、物語番号はその上下目録の通し番号である。[2]

一

前稿の検討によれば、大納言物語とまず認定できるものには、今昔物語集所収のものとほぼ同文脈をもつ八十の物語群があり、拾遺物語には、隆国没後治承の頃までの事件とみられ、かつ古事談・古本説話集とは重ならない十八の物語（60～69の古事談類中唯一古事談と重なっていない62は除く）がある。それらをもとに両者の特徴や位相を探るにあたり、拾遺物語の数がやや少なすぎるので、今少し確実と見られるものを補っておきたい。

拾遺物語十八の中には、6・75・129・182など結末を笑いに解放するものや、11・14・72・79など結末多くを語らずただ聞き手（読者）の笑いを誘うようなものが目立つ。それらはたとえば、

○中納言をはじめて、そこらにつどひたる物どももろごゑにわらふ。聖も手をうちてふしまろびわらひけり。（6中納言師時法師ノ玉茎検知事）

○これをきき伝へたるものども、一度に「は」ととよみわらひけりとか。（182仲胤僧都連歌事）

○さきにいはれにければ、いふべき事なくてふとにげて走入にけり。（74陪従家綱兄弟互ニ謀タル事）

* 国文学研究室（昭和58年9月27日受理）

○障子のうちへぐしていられにけり。そのゝちはいかなる事かありけん、しらず。
（79一乗子僧正事）

などとあるが、それらの物語と連続して収められ、結びが、

○あつまれる人ども、一度に「は」とわらひたるまぎれに、逃ていにけり。
（5随求ダラニ篭額法師事）

○むごの後に「えい」といらへたりければ、僧達わらふ事かぎりなし。
（12児ノカイ餅スルニ空寝シタル事）

○そこらに立どまりてみける物ども、一度に「は」とわらひけるとか。
（15大童子鮭ヌスミタル事）

○人々ほをえみてひとりふたりづつこそ逃失にけり。
（77実子ニ非ザル人実子ノ由シタル事）

○……といひたりければ、人みな「は」とわらひけり。
（80或僧人ノ許ニテ氷魚食タル事）

となる五つ、および12につづき同じく比叡の児のことを語る「13田舎児桜ノ散ヲ見泣事」、「はこすべからず」といういい加減な仮名暦を信じて、

○「いかにせん〳〵」とよぢりすぢりする程に、物もおぼえずしてありけるとか。

となって結び、苦笑させる「76仮名暦誂タル事」の二つは、拾遺物語とみてよいだろう。それら七つは、いずれも他の拾遺物語とともに流布本巻一・巻五あたりに集中しているものである。

さて、以上の八十と二十五の各物語群をもとに、まずは単純に用語や語法によって位相をみようとする場合、少なくとも体言・用言・副詞なら十例以上、助詞・助動詞なら二十例以上は全体で用例があって、しかもそれらが一方だけで使われているというあり方でなければ、あまり有用でないと思われる。そして、そのような条件に適う用語は、宇治拾遺中ほんの数語とみられる。[3]

まず、「すゝばなをのごはぬなめりとみゆ。」といった複合助動詞の「①ナ（ン）メリ」。これは、総索引によれば全体で三十二例あるが、うち大納言物語に十七例、拾遺物語、さらに古事談類にはみられず、古本説話単独に重なるものに一例（「88観音経化蛇輔人給事」で、前稿に述べたように大納言物語の可能性がある）、他の十四例は所属不明の物語中にみられる。

「さば、いざ清水へ。」「我身はさば観音にこそありけれ。」といった副詞の「②サバ」。[4] これは全体で二十二例中大納言物語に十四例、不明のものに八例ある。

「いかでかは我独逃ん。」といった係助詞の「③カハ」。これは全体で二十一例（総索引は三五三頁⑦の例脱落）、うち大納言物語に九例、今昔とも重なる古本説話類「149貫之歌事」に一例、他は不明のものにある。

名詞の「④下種（げす）・下人（げにん）」。これは下種十二例・下人十一例がみられるが、いずれも拾遺物語にはなく、大納言物語に下種七例・下人十例、その他は不明のものにある。

今一つ、文体的要因のつよい物語冒頭句の「⑤昔」。これは全体で三十四例中大納言物語に二十三例、拾遺物語にはなく、不明のものに十一例ある。なお、「これも昔」とするものが大納言物語「93五色鹿事」に一例だけある。[5]

さて、逆に拾遺物語のみにあって大納言物語にないといったものは、十例以上用例をもつものにはないように見える。ただ、拾遺物語は、つぎのような会話中の呼掛詞に特徴が認められる。

「やゝ、庁には又なに物か候。」といった「ヤヤ」。[6] これは五例中四

例までが拾遺物語、あと一例は所属不明の「189門部府生海賊射返ス事」みられる。「やうれとよべば」といった「ヤウレ」。これは三例すべて拾遺物語中にある。「や、なおこしたてまつりそ。」といった「ヤ」。これは、上の例は拾遺物語であるが、あと二例は不明のもの――さきの「ヤ、」をもつ189と「8易ノ占シテ金取出事」にみえる。また、くは、見給へ。」といった「クハ」六例および重複の「クハクハ」二例。うちクハ二例とクハクハ二例が拾遺物語中に、三例は不明のものに、あと一例が大納言物語「180珠ノ価無量事」のさえずる唐人の言葉に「くは、これぞ〳〵。」として出る。これらは、用例でみる限りいずれも敬意のない男言葉だったようで、とくに「クハ」は、粗野なひびきの語だったようである。なお、「おうおう・をうをう・おいおい」計四例など、大納言物語だけに出るものもあるが、概して拾遺物語のほうが、会話部分がより現実写実的かと見られる。

以上のほか、ある程度の傾向が知られるものにつぎのような用語がある。

係助詞の「ナム」。これは百余の例があるが、大半が大納言物語中のもの、拾遺物語にはただ一例「御馬をなんたびけり。(101)」があるだけである。また、指示詞の「アノ」と「カノ」。これは、大納言物語には両方使われているが、拾遺物語には四例の「アノ」のみしかみえない。

以上が、これまで私の目に入った限りの、大納言物語と拾遺物語の用語上の位相である。それらが一般的社会的な言葉づかいの変化によるものか、さまざまな文体的要因によるものかは、単純には決めにくいだろう。ただ、大納言物語と拾遺物語の用語に、ある程度の位相が認められる一方、この程度の位相でしかないともいえることは、平安中後期の公家言葉の一定の安定度を示唆しているだろうし、それがまた、大納言物語・拾遺物語の融和度の根底をなすということだろう。そして、平安女房文学の言葉が平安期の言葉で、宇治拾遺語は、「鎌倉時代の庶民の口語を反映して」いる(国語学大辞典所収国語年表)などとはとてもいえないものとしても、平安女房文学にみられにくい用語が、岩波大系本頭注でなされるように日葡辞書などで検することができるとすれば、以後鎌倉室町期数百年の、京を中心とした言葉の基層にあり続けたことをも示唆するだろうか。

大納言物語と拾遺物語の位相としてもっとも顕著なのは、用語よりもむしろその語りの構成・展開のあり方である。それは一言でいえば、大納言物語は起承転結構成であるのに対し、拾遺物語は序破急構成であるということである。

大納言物語は、まず人物（ときに場所や物）が紹介され、場合によってはその人物をめぐる一般的な状況が語られ〈起〉、それをうけてその人物（場所・物）を主体とする事件の発端が語られ〈承〉、その事件の意外な展開が語られ〈転〉、さいごにそれがどう落着したかが語られて終り〈結〉、しばしばその後日談なども付けられる。むろん各部分の長さや続き具合は、物語によってまちまちであるが、総じて聞き手（読者）に一つの事件の全貌を十分得心させるだけの親切な語りがなされている。また、その〈承〉から〈転〉、〈転〉から〈結〉へは、しばしば「かくて・かゝる程に・かくするを・かくするうちに・さて」等によって、時間・空間的な場面の転回があるのが常で、それが、たとえば「18利仁薯蕷粥事」「97長谷寺参籠男預利生事」などのように、〈転〉の部分で幾度もくり返されることもある。

他方拾遺物語は、人物とその居る場が示され〈序〉、ただちに事件の只中に導かれ〈破〉、意外な展開があってそれが高揚したままいわ

ば「はっ」と終る〈急〉。場面はおおむね一場きりで、時間空間的な新たな転回を含まない。それは、人間世界の諸相をワンカットで切りとって示すといった趣で、当然後時・後日のことなど「知らず」というわけである。

一つの物語の展開を起承転結とみるか序破急とみるかは、見解の相違も出てこようが、これまで大納言物語・拾遺物語と認定したものにおいて、この特徴は例外なくあざやかに二分しており、もっとも明確に両者を識別できる「型」だといえるだろう。(7)

さてここで、用語および物語構成のあり方によって、所属不明の物語のうち、かなり確実に大納言物語とみなせるもの――起承転結的展開をしており、用語①ナメリ・②サバ・③カハ・④下種・下人・⑤冒頭句の「昔」のいずれか、および⑥係助詞ナム・⑦後日談などももち、さらに前稿で時代のわかる物語について検した他の大納言物語の特徴などもみられるものを挙げてみよう。

33大太郎盗人事　①が二度・②・⑤あり。

○昔、大太郎とていみじき盗人の大将軍ありけり。……大太郎がとられて、むさの城のおそろしきよしをかたりける也。

という始めと結びは、大納言物語「28袴垂合保昌事」の、

○昔、はかまだれとていみじき盗人の大将軍ありけり。……いみじかりし人の有様也と、とらへられてのちかたりける。

と同工であり、しかもこのように語り手の具体名が記されるものは、これらを含めて宇治拾遺中全部で八例、うち六例までが大納言物語で、右の33とつぎの124が所属不明のものであった。33は大納言物語だと断定できる。そして、

124海賊発心出家事　①・②・⑥あり。

これも、昔、淡路の六郎追捕使といって海賊だったという入道が「かたり侍りけり」となっており、大納言物語かとみられる。

110クウスケガ仏供養事　②あり。

111ツネマサガ郎等仏供養事　①が二度・②・⑤あり。

○くうすけといひて兵だつる法師ありき。したしかりし僧のもとにぞありし。……人のよぶ所にはいかずして、ここに来けるとぞきゝし。(110)

○昔、ひやうどうたいふつねまさといふ物ありき。それは筑前国やまがの庄といひし所にすみし。……それをとひきゝて、おかしかりし中にも、おなじ功徳にもなればときゝし。(111)

二つ一まとめの物語とみえ、右に示した冒頭部や結末部が、「編者の体験の伝承のような書き方」(岩波大系本頭注)ともいわれているが、他にキ止め冒頭文をもつのは、大納言物語中の隆国没年に近い三例ほか異国物語などの計七例だけであり、これらは大納言物語とみてよいだろう。その他つぎのものは、大納言物語の可能性がある。

19清徳聖奇特事　④・⑥あり。
22金峯山薄打事　⑧あり。
26嘯明封蔵人少将事　⑤・⑦あり。
47長門前司女葬送時帰本処事　④・⑦あり。
48雀報恩事　①・③・⑥あり。
57石橋下蛇事　①・⑦あり。
83山横川賀能地蔵事　②・⑦あり。
88観音経化蛇輔人給事　①あり。
89自賀茂社御幣紙等給事　③あり。
133空入水シタル僧事　①・⑦あり。

144聖宝僧正渡一条大路事　⑤あり。
155宗行郎等射虎事　③・⑥あり。
156遣唐使子被食虎事　①・③・⑦あり。
165夢買人事　④あり。
178魚養事　①・②・⑥あり。
193相応和尚上都卒天事付染殿后奉祈事　④あり。
194仁戒上人往生事　①・④あり。

なお、語り手の具体名はないが、その物語を「人かたる・かたり伝ふ」などとするものが宇治拾遺全体で十二例あり、うち八例は大納言物語、他の四例は不明のものであるが、そのうち三例は右の22・83・155である。用語上の徴表は認められないが、残り一つ、

21同僧正大嶽ノ岩祈失事

および、同一主人公による直前の、

20静観僧正祈雨法験事

そして今一つ、物語の主人公が「京にきて語けるとぞ。」と言う、

17修行者逢百鬼夜行事

以上の三つもまた大納言物語の可能性があるとみられる。

拾遺物語については、つぎの二つが拾えるだろう。

130蔵人得業猿沢池竜事
189門部府生海賊射返ス事

これらはいずれも、構成は曖昧で、起承転結的のようでもあるが、用語に、大納言物語の徴表となるものは何もみられない。130は得業恵印が院政期末ごろの人物かともみられており、「目くら」と「鼻くら」の語呂合せの「をかし」さをいう結末は、拾遺物語にとくに著しい関心のとり方である。189はさきに見たように会話中に呼掛の「ヤヤ・ヤ」が使われており、指示調はアノである。海賊が逃げて後、「此府生……笑てゐたりけるとか。」と結ぶあり方は、拾遺物語「181北面女雑使六事」の「此六のちにきゝてわらひけりとか。」という結び方に類似する。

その他、3・16・34・35・36・49・50・51・71・73・82などが、用語・構成・内容などから拾遺物語かと思われるが、なお問題も残るので保留しておきたい。

二

宇治拾遺物語中で、時代不明の、地下の人々だけが登場する物語は、六十余りである。それらをまず、物語中どのような人物として呼称しているかによって類別し、今昔類（大納言物語）古本説話類（今昔とは重ならず古本説話のみと重なるもの）・単独類（その一部が拾遺物語）ごとに表示してみよう。物語番号の下は、他のどんな人物や事物と絡んで語りがなされているかのメモである。かっこつきの番号は、時代がわかる物語の中から上項にかかわるものを補った。

ところで、今昔物語集巻第二十九は、数々の盗人の悪行を連ね、平安期の世相の裏をよく窺わせるが、宇治拾遺にも少なからず盗人の物語がある。しかし、大納言物語とみられる表の六つは、たとえば28・58・132・176いずれも今昔の巻二十九以外の巻で重なることからも明らかなように、盗みの悪行そのものを語るのが目的ではない。それは、「いみじき盗人の大将軍」である袴垂や大太郎が、夜中笛を吹きつつ練り行く摂津前司保昌の気配に圧されて引剝ぎできず「あさましくむくつけくおそろしかりしか」と語り(28)、また、綿密な下見の後侵入

	今昔類（大納言物語）	古本説話類	単独類 大納言物語カ	単独類 不明	単独類 拾遺物語
盗人	(28)保昌 58発心 (132)則光 (176)寛朝		33武者 124発心	(126)物売 157中将	
相撲	31学生 166妹 177蛇		博打	114聟入	
東木人	120猿神	40 147 150歌		3こぶ取	
職人	54金塊 (180)玉	88観音 22金薄		38火事	
名のつく男	96京童 (107)道術 192毘沙門	(43)歌 165夢買		(159)むさゝび	(14)聟 (74)猿楽 189弓術
名もなき男	(44)地蔵 87 90 97観音 112歌 56妹背島	111仏供養 155 156虎		52狐 70地蔵 160鬼	15鮭 77非実子
女	109 131観音		47非送 48雀 57蛇	8易占 16地蔵 53狐つき	76仮名暦 181ろく
別当	45地蔵 55地獄 113地獄 168殺生		83地蔵		(2)平たけ 80氷魚
僧	25長鼻	89明神 110仏供養		73西方	12 13ちご 130竜
聖	105猟師 (145)穀断 168魔往生 173飛鉢	(102)信貴山 (19)奇特 133空入水		7猟師	5ダラニ (6)中納言
修行者	136斎神		17百鬼	36渡海	

した家で得体の知れぬ恐怖に襲われ、矢を爪よる音におびえて逃げ出し「武者の城のおそろしきよし」を語った(33)という物語である。あるいは、一蹴で中空高く盗人を蹴上げた老僧正寛朝(176)、盗人三人を仕留めた功を他に譲る則光(132)、身を捨てて示した行為によって悪人共を発心出家させた相人(58)や若き僧(124)を語るものでもある。そこでは、いみじき悪人盗人さえも、呪縛し改心させ讃仰させるある種のかくれた人の力にこそ、語りの関心があったとみられるだろう。

そうしたことは、相撲を主人公にする三つの物語においても同様にいえる。それらはやはり相撲そのことを語らず、成村という相撲の頭目格の者さえ色を失って逃げた「あさましく力ある」誰とも知れぬ大学の衆のこと(31)、盗人の質にとられて泣きながら無意識に指先で矢竹の節をくだき盗人をおそれ逃げさせた、兄の相撲の二人力もあるみめよく姿細やかなその妹のこと(166)、また、あとで確かめると六十人力以上もあった大蛇を引きちぎった経頼という相撲のこと(177)、というように、想像を絶した人のかくれた力を讃嘆する物語である。隆国は二十代のころ、ことのほか相撲好きであった由(8)で、そのこともやはり常人を超えた力持ちへの関心であったと思われるし、相撲にかかわる物語を隆国に語り伝えた層もおのずから知れるが、ならば盗人――ことに袴垂や大太郎が「とらえられて語りけり」と記されるものなどは、いかにして伝わりえただろうか。

長久四年(1043)六月、四十才のとき、源隆国は、急逝した藤公成の後をうけて検非違使別当を兼ねた。別当は、容儀・才学・富貴・譜代・近習の五賢を備えた者に仰せられる(9)という栄えある重職である。ところが翌五年七月、隆国はそれを辞任している。経緯は不明であるが、大納言物語等から推せば、閻魔役は性に合わないといったところだったろうか。しかし、検非違使庁とのかかわりが大納言物語に遺した影は、けっして少なくなかったとみられる。28・33、そして検非違使の登場する58だけでなく、職人欄の22では、金峯山から金薄を盗んで発覚し、「検非違使ども」に河原で「かうじ」され、「背中は紅の練単衣を水にぬらして着せたるやうにみさ〳〵と成て」ついに死んだ薄打のこと

が、また、「名のつく男」欄の96は、忠明という検非違使が京童といさかいし、清水の御堂から蔀を脇はさみグライダーのようにしてとびおりて逃げたことが、リアルに語られている。

大納言物語において、相撲・盗人・検非違使以外の地下の人々の物語で、ともかくも具体名が明らかにされるのは、滝口道則(107)、伊良縁の世恒(192)ぐらいであり、また、それら地下の物語中には、「120吾嬬人止生贄事・56妹背島事・48雀報恩事」「114博打子聟入事（冒頭句は昔）」など、いわゆる民話的な、かなり一般化していたかと思われるものも含まれているが、それらのことに対比して、相撲・盗人らのかかわる物語の特異な具体性は、やはりそれなりの情報源の裏付けあってのことと考えられる。なお、鉄採りの出る「54佐渡国ニ有金事」、大隅国郡司の出る「112歌読テ被免罪事」、商人・遊女・唐人なども出る「180珠ノ価無量事」は、どれも国司や宇治殿とのかかわりが記されるもので、当然そうした経路から隆国の耳に達したと推察されるものである。

さて、その他の今昔類で、主人公が単に男・女せいぜい郎等・侍・女房などとされるだけのものは、表にメモしたように、すべて観音等の霊験物語である。そこでは、「父母、主もなく妻も子もなくて只一人ある青侍」(97)、「たよりなく……よりつく所もなき」女(131)、あるいは「物くふこと」さえ難い(109・192)無一物ゆえに、ひたすら仏にすがって、ついに福徳を得る男女が語られている。また、狩の途中の「いささかの帰依」により地蔵菩薩に地獄で助けられて蘇り、以後殺生を断って地蔵に仕えた男(44)、夢にお告げのあった観音だとして人々から拝みに拝まれ、ついに「我身はさば観音にこそ」と思うに至り、武器を捨てて出家する男(90)、なに仏とも知らずただ丸頭の仏像を造り供養する男(111)といった愚直で一途な人々の仏への帰依が語られている。しかし、何仏に仕えるにせよ、そうしたひたむきな祈念こそが、おのずから生を利する力となりうるのだという視点がそこにこめられていることは、それらを、僧たちの仏法へのかかわりを語るものと比べたとき、明らかにわかるだろう。

諸寺の別当――それは大納言物語の中でもとくに類型化された存在である――彼らは、

○いまはむかし、薬師寺の別当僧都といふ人ありけり。別当はしけれども、ことに寺の物もつかはで、極楽に生れん事をなんねがひける。……さばかりの物（かりたままの五斗ばかりの寺の米）つかひたるだに火の車むかへにきたる。まして寺の物を心のままにつかひたる諸寺の別当のちごくのむかへこそおもひやらるれ。（55薬師寺別当事）

○今はむかし、奈良の大安寺の別当なりける僧の女のもとに、蔵人なりける人しのびてかよふほどに、（夢に別当の家族が泣きながら鬼から銅の湯を飲まされるのをみて、めざめ）寺の物をくふにこそあらめ。それがかくはみゆるなりと……其後はつゐにかしこへゆかずなりにけり。（113大安寺別当女ニ嫁スル男夢見事）

というあり方、あるいは、

○家に仏師をよびて地蔵をつくらすほどに、別当が妻こと男にかたらはれて、跡をくらうして失ぬ。別当心をまどはして、仏の事をも仏師をもしらで、里村に手をわかちて尋もとむる……。（45印播国別当地蔵作差事）

また、「父の鯰に成たるを知ながら殺て食」「大きなる骨喉にたてて」死ぬ(168)というように、我利にかまけ、役得ほしいままで、「地獄の迎へ」必定の破戒僧どもである。また、他の寺僧にしても、貴い僧として「身の徳ゆたかに」栄えているものの、自分の鼻をもて余して鼻もたげの童に雑言のかぎりをつくす禅珍内供(25)、強欲極まりないやり方で仏供養をする兵だつる法師(110)など、むしろ笑いの対象と

して語られている。

寺はすでに修行・信仰の場ではないとして、山に入り聖となった人々はどう語られるだろうか。単独類(19)の清徳聖は、「片時やすむ時もなく」亡き母の供養につとめ、わが身を卑くして餓鬼畜生らに施し、まことに「奇特」のいみじき聖であった。しかしおおかたは、他念なく修行をしても、知恵なくかたくなで、狸や天狗にあざむかれて仏菩薩の幻にまどわされたり(105・169)、「我ばかり貴き者はあらじと驕慢の心」をおこしたり(173)、あるいは世の人の尊崇を得ようと、できもしない穀断や入水を装い(145・133)、無様に笑いの種をまくのである。むろんそれらは、特異な存在であったからこそ語り草になったという側面もあるだろうが、(一方に撰集抄に伝わるような聖の語り方もあるのだから)そうした物語を主にしたところには、寺僧や聖に対する隆国の一定のみかたが窺われるように思う。ただの男・女の愚直な一念こそ、仏菩薩にはよく聞きとげられ、生きる力となるのだ。

○人の祈は、僧の浄・不浄にはよらぬ事也。只心に入たるが験あるもの也。「母の尼して祈をばすべし」とむかしよりいひつたへたるもこの心なり。

(191極楽寺僧施仁王経験事)

とは、おそらく隆国確信の言葉である。

ただしかし、すぎし昔にさかのぼれば、右(191)の極楽寺の僧のように、つよい念力をあらわす僧がしばしば居たと伝えられている――と大納言物語は語ってもいる。前稿で表示したように、隆国没年までの物語で、文献からある程度経歴の知れる高名な僧は、今昔類でも単独類でもすべて隆国末生以前の人物――最も新しい三川入道寂昭も、隆国生年の前年渡宋し彼地で寂した――である。とくに、道心堅固の内記上人(140)・有験の名高い持経者叡実(141)、わざとの物狂増賀上人(143)・鉢飛ばしの法で唐僧をしのいだ寂昭上人(172)など、隆国の祖父西宮殿高明とほぼ同じ頃の人々が、今昔類には多くみられる。ところで、そのうち三つの物語を含む137から144までの八つは、同じような僧の物語がつづきながら、今昔に重出するものとしないものとがあり、それも、たとえば22～33あたりの今昔重出物語とは少し異なり、今昔の一部分がやや簡略になったような重なり方である。冒頭句は、何もない139・140以外はすべて「昔」である。また、天竺僧のことである137・138、および139などは、漢文的な何かの書承かと思われるような用語が目立ち、総じて、他の今昔類世俗の物語より表現がかたい。物語構成は起承転結的ではあるが、はっきり場の転回をもつのは143・144だけで、あとは続き具合が曖昧で説明的でもある。内容は前から順に二つずつで類似性をもっている、など、さまざまな要素が乱れ混っている。とりあえずそれを、表に整理してみよう。

目録	今昔との関係	冒頭句	結び	構成	内容
137達磨見天竺僧行事	巻4―9 一部簡略	昔	となん	曖昧	天竺僧
138提婆菩薩参龍樹菩薩許事	巻4―25 全部簡略	昔	となん	〃	〃
139慈恵僧正延引受戒之日事		ナシ	けり	〃	予知救済
140内記上人破法師陰陽師紙冠事	巻19―13 一部簡略	ナシ	けり	〃	破邪救済
141持経者叡実効験事	巻12―35 一部簡略	昔	とか	〃	加持効験
142空也上人臂観音院僧正祈直事		昔	なり	〃	〃
143僧賀上人参三条宮振舞事	巻19―18 一部別主語	昔	けり	起承転結	佯狂
144聖宝僧正渡一条大路事		昔	なり	起承転結	捨身狂態

この表だけでも、これらは今昔に重なると否とにかかわらず一群同

類かとみられるが、まずは今昔との重なり様を137・140・143の一部によって見てみよう。カタカナ文が、岩波大系本による今昔物語集の相当部分である。

○　老僧答云　「年来此事より外は他事なし。　但黒勝ときは我二人ノ古老答テ云ク「我等年来碁ヲ打ヨリ外ノ他ノ事无シ。但シ、黒勝ツ時煩悩勝ぬとかなしみ、白勝時は菩提勝ぬと悦ぶ。打に随て煩悩の黒を失ひ菩ニハ我ガ身ノ煩悩増リ、白勝ツ時ニハ我ガ心ノ菩提増リ、煩悩ノ黒打チ随ヘ提の白の勝ん事を思ふ。　此功徳によりてテ菩提ノ白増ルト思フ。〈此ニ付テ我ガ无常ヲ観ズレバ〉其ノ功徳勿ニ顕ハ證果の身と成侍なり」と云々。レテ證果ノ身トハ成レル也」ト云フヲ〈聞クニ涙雨ノ如ク落テ悲キ事无限シ。

和尚房を出て他僧に語給ひければ、和尚ノ云ク「……(略)……」ヲ云テ、返々礼テ〉房ヲ出テ他ノ比丘ニ値ヒヌ。年来にくみいやしみつる人々後悔してみな貴みけりとなん。(137)

○上人の云やう、「それはさもあれ。いかが三世如来の御首に冠をば着給。此ノ由ヲ語レバ、諸ノ比丘此ヲ聞テ貴ブ事无限シ。

□云ク、「然リト云フトモ何デカ三世ノ諸仏ノ御首ニハ紙冠ヲバ為ム。不幸にたへずしてか様の事し給はば、堂作らん料に勧進しあつめたる物共を貧サニ不堪シテ此クシ給ハバ、我ガ此ノ知識ニ曳キ集タル物共ヲ皆其汝になん。一人菩提に勧れば　堂寺造に勝れたる功徳也」ニ進ナム。一人ノ菩提ヲ勧ムル功徳トテモ、塔寺造タラム功徳ニ可劣キニ非といひて、　弟子共をつかはして、材木とらんとてズ」ト云テ、〈我レハ川原ニ居乍ラ〉弟子共ヲ遣テ、勧進しあつめたる物をみなはこびよせて此陰陽師にとらせて、　さて我身知識ノ物共ヲ皆取寄セテ此ノ陰陽師ノ法師ニ揮ヲ与ヘテ□は京に上給にけり。(140)ハ京ニ上ニケリ。

○　「尤たうとき事也。僧賀こそは誠になしたてまつらめ。」聖人「糸貴キ事也。増賀コソハ尼ニハ成シ奉ラメ。〈他人ハ誰カ成シ奉ラとて参けり。　弟子共　此御使を嗔て打たまひなんとやせんずム。〉」ト云ヘバ、弟子共此ヲ聞テ「此ノ御使ヲバ嗔テ打テムズト思ツルニ、らんとおもふに、思の外に　心安く参給へば、ありがたき事に思あへ不思ザル外ニ此ク和カニ参ラムト有ル、希有ノ事」トゾ云り。　かくて宮に　参たるよし申ければ、悦てめし入給てヒケル。カクテ三条ノ宮ニ参テ参レル由ヲ令申ム。宮喜バセ給ヒテ〈「今日尼になり給に、上達部　僧共、おほくまいり集り内裏吉日也」トテ〉御出家有リ。上達部少々可然キ僧ナド多参リ合タリ。　内ヨより御使などまいりたるに、此上人は　目はおそろしげなるが体も貴リモ御使有リ。　此ノ聖人ヲ見レバ目ハ柿シ気ニテ　貴げながらわづらはしげになんおけしける。(143)ト乍　煩ハシ気ニゾ有ケル。

今昔に重出する場合、いずれもその重なる部分においては同文脈であり、中でも和語的な語り口のつよい143など、今昔の方は主体が三条大后側であるという違いがあるにもかかわらず、かなりよく重なっている。しかし、137・140に顕著なように、とくに実線部分などの用語・

表現の相似性、波線部分などのその相違性、＜＞に入れた今昔だけにある部分、二重線部の用語・用字の同一性などに見られるありようは、漢文風の同一の典拠を、両者が各別々に和文化したゆえの現象とみるほかないだろう。[10] それは概して、宇治拾遺のほうが簡略でよく筋がとおるように意訳され、情緒を出す表現をすることはあるが敷衍はほとんどないとみられもする。そして、今昔にはない139・142においても、「出仕を相待の所に」「受戒は延引也」(139)「参会し給」「幼稚の時」(142)など、宇治拾遺中そこだけにしか見られない漢語的な用語が出る。おそらく、少なくとも139～142の僧の物語は、漢文風の典拠(一書であるとは限らない)を、今昔・宇治拾遺各独自の選択・和らげで書承し、[11] したがって今昔とは重ならないものもあるということではないだろうか。その重ならない139・142および他所の今昔には出ない僧の物語――「20静観僧正祈雨法験事・21同僧正大嶽ノ岩祈失事」「134日蔵上人吉野山ニテ逢鬼事」「193相応和尚上都卒天事付染殿后奉祈事」は、いずれも隆国未生以前寛平・延喜以降の僧たちの、予知力や効験を語るものである。[12] 前稿にもふれたように、今昔はそうした仏・法よりも僧(人)の念力が表面だつ物語は、菩薩たる弘法大師以外で採らなかったとみられるが、逆に宇治大納言は、そのようなものにこそ関心があったのではないか。

いささか素行が常識からはみ出し気味で、晩年はしきりに官を辞しもした隆国は、とりわけ、

○きはめて心武う、きびしくおはしけり。ひとへに名利をいとひて、頗物ぐるはしくなんわざと振舞給けり。(143増賀上人)

○召れけれど、京は人を賤うする所なりとて、更にまいらざりけるとぞ。(193相応和尚)

といった、狂態で、名利をいとい、凡俗凡僧の目にはその力がかくされてもいた昔の聖たちに、共感とあこがれをもっていたのである。

三

ここですこし拾遺物語のほうに目を移し、その性格をとおして逆に大納言物語を眺めることにしたい。

拾遺物語の特徴として、序破急構成以外で目に立つのは、その大半が、いわば「興言利口」にかかわる笑い話であるということである。興言そのものの猿楽のことを語る「74陪従家綱兄弟互ニ謀タル事」はもちろん、ちぐはぐな応答が滑稽な「12児ノカイ餅スルニ空寝シタル事・77実子ニ非ザル人実子ノ由シタル事」、嘘の露見も間髪を容れず言いくろめて笑わせてしまう「5随求ダラニ籠額法師事・15大童子鮭ヌスミタル事」、そうした言葉のとび交う中で少し気の毒な馬鹿正直な人々(「76仮名暦誂タル事」のなま女房・「181北面女雑使六事」の刑部録)、そのような口舌の時代に説法ならびなき人として活躍する仲胤僧都(2・81・182)、硬直した上様の意識をうつ下々の知恵ある言葉(10・72)など、その「言葉」をめぐる才気あふれる世界は、人間の精神や肉体のかくれた力を語ることの多い大納言物語とは、かなり異質である。

ところで、拾遺物語に登場する地下の人々は、ほとんどが宮廷や公家に仕えるか、その周辺界隈に出没した人々である。それらの中には、大納言物語の「18利仁いも粥事」の五位、「23用経荒巻事」の用経、「94播磨守為家侍佐多事」のサタといった、「をこ」の系列に連なる76の「なま女房」・14の「小藤太」、129の「源行遠の従者」などのような者も居るには居る。しかし、歌のことで勅撰集の撰者通俊卿をやりこめた泰兼久(10)、「理非明察」(保元物語上)の宇治左大臣に正理で抗弁する大膳大夫以長(72・100)、さらにその利口を殿上人もてなし興じる

女雑仕六(181)や、おのが盗みも巧言で強弁する大童子(15)など、後世の狂言の中の人々につづくような「かしこくうるせき」下層の人々が新たな語りを得ている。

一章で見たように、拾遺物語とみなせるものには、「下種・下人」さらに「下臈」という語も出てこないが、当時それらの言葉が死後であったはずはないから、そのことは、それほど広くはない拾遺物語の語りの範囲において、それらの語を使う必要もなかったか、あえて使わなかったかのどちらかだろう。ただ、拾遺物語の時代(院政後期)、かつて隆国の頃ならそうした言葉で一からげに指してすませていた層に対して、公家上層部の視野や関心が急激に開かれていたことは、後白河院の梁塵秘抄や年中行事絵巻、慈円と良経の「南海漁父北山樵客百番歌合」といった名目などから推察もできる。人々は、僧俗上下互に興じ合える言葉と表現力を、「貴賤老少口々相伝」(古語拾遺)の上古の世以来、ようやくあらためて獲得し直したのである。下々の語りとその心に耳を傾け、それを公家や高僧を語るのと等しく、虚飾のない自然で伸びやかな日常語で語り直し、公家男子としてはいささか狂態なその行為を、はばかることなく文字に記した大納言源隆国を先鞭として(13)——。

○童部なれども、かしこくうるせきものはかゝる事をぞしける。
(27季通欲逢事事)

○聖なれど、無知なればかやうにばかされける也。猟師なれども慮ありければ狸を射害、そのばけをあらはしける也。
(105猟師仏ヲ射事)

「○○なれど」というとき、隆国はその○○に対する世間や自らの固定観念が語りの中でつき崩されるのを知った。しかし、「○○なれど」というとき、その○○——猟師のような下種、あるいは下人・童部といった者たちが、一般には無知で「をこ」なる者であるという観念を脱しきれているわけではない。人々が「○○ならばこうだろう」というイメージに縛られているからこそ、聖ならば、穀断も入水も装わねばならなかったのである。大納言物語が、人の分限についての固定観念を完全に払拭したのは、二章で述べたような神仏への祈念や帰依のこころのレベルにおいてだけだった。そこでみられた、とくに名もなき女の物語は、異国物語の「30唐卒都婆ニ血付事」や単独類47・48・57も含め、すべて、年老いあるいは幸薄い女たちが、その心の一途さゆえに徳を得、救われるといったものばかりでもある。ある固定観念をつき崩すためには、新たなイメージの構築を必要としたのだろうか。

拾遺物語の語り方はそうではない。そこで語られる人々には、大道で鮭を盗む大童子が居れば、氷魚を盗み食う僧が居る。煩悩を切り捨てたという聖法師も、一生不犯の講を行う大納言雅俊も、ともに似たような結果に落ち着いて人々の笑いをさそい、聟や甥(14)のしわざにかかって失神しのけぞり臥す姿は、侍小藤太も大僧正覚猷も同じである。大納言物語ではけっして具体的に語られることのなかった帝や院さえ、他の人々と同じくよく笑う人間らしい相貌をもって語られている。そこには、「○○ならばこうだ」といった固定観念はむろん、「○○なれどもこうだ」といったそれへの一定の批判さえないようにみえる。もはや「いみじき盗人の大将軍」も、「かばかりの行者はあらじ」と慢心する程の聖だにも居ない時代——勅撰集の撰者が歌の知識で下々の者に劣り、礼節や理非にうるさい宇治左府さえ古侍の以長にやりこめられる時代なのだ。拾遺物語はそこで、通俊卿や左大臣頼長が、ただ頷いて黙るといった語り方をとった。それはそれなりに上にも下にも言葉の解放されたよき時代——「宇治に遺れる」おおどかな「昔心」

も拾えた時代だったのだ。

いかなる賢王賢主の御政も、摂政関白の御成敗も、世にあまされたるいたづら者などの、人のきかぬ所にて、なにとなうそしり傾け申事はつねの習なれども、此禅門世ざかりのほどは、聊いるがせにも申者なし。其故は……をのづから平家の事あしざまに申者あれば、(禿)一人きき出さぬほどこそありけれ、余党に触廻して其家に乱入し、資財雑具を追捕し、其奴を搦とって、六波羅へゐてまいる。されば、目にみ心にしるといへども、詞にあらはれて申者なし。

（平家物語　禿髪）

「此禅門世ざかりのほど」(1162)〜(1183)と「法性寺殿の御時」(1121)〜(1158)というあまりに落差の大きい二つの時代にわたって、おそらく政治の只中で生きざるをえなかった拾遺物語の筆者は、もはや人間のありようについて何の固定観念ももちえず、ただ、言葉と言葉の偶発的な一瞬の出会いの「をかしさ」を語りあつめることに、自らを韜晦した。[15]「法性寺殿の御時」の実感をもたないやや若い層からは、固定観念になお必死で殉じることによって逼塞した状況をこえようとした、たとえば故法・礼節に謹厳そのものの兼実(久安五1149生)、定家(応保元1162生)のような歌人、求道一途の明恵・親鸞(承安三1173生)といった志操ひたむきな人々が、つづいて出た頃でもあった。

四

さて、二章の考察で、大納言物語には、隆国未生以前の僧の物語や異国物語を中心に書承とみられるものと、相撲・盗人・検非違使らを主人公とする物語や語り手明示の物語を中心に口承とみられるものとがあることが推察された。書承の場合、今昔と重なるもので対比してみる限り、おおむね二章でごく一部を示したようなあり様——従来いわれるように今昔との直接書承関係はなく、概して今昔よりよく筋の通る達意の意訳とみられるが、原拠を改竄したり敷衍したりはせず、その原拠には漢文風のものとある程度和文化されたものとがあったとみられる、といったことが推察もされる。そうした書承が、かなり確実視できるものには、91 92 93・106・137 138 139 140 141 142 143 144 145・164・167 168 169 170 171・174・176・178・195 196 197（かっこ付きは異国物語）の二十五、あるいはそうかと見られるものには、19 20 21・30・59・86・108・134・175・192 193 194の十二などがあり、大納言物語の三分の一ほどは書承の物語だったとみられる。[16]

ところで、一章に挙げた大納言物語に特徴的な用語①ナメリ・②サバはナメリ一例が右に挙げた中の「168上出雲寺別当父ノ鯰ニ成タルヲ知ナガラ殺テ食事」に、サバ三例が同じく「91帽子叟与孔子問答事」のいずれも会話中にみられるだけであり、それらは、書承的なものには使われにくい用語だったことがわかる。そのうちサバについては、大納言物語の確実な十四例中十例について、その今昔相当部分に「然ラバ・然バ・然」が使われており、岩波大系本今昔では、文脈によってすべて「サラバ」と「サレバ」で訓みわけている。具体的には、つぎのとおりである。

〈明らかなサラバが対応するもの三例〉

(1)「さば国の大臣か。」「それにもあらず。」「さば国の司か。」「それにもあらず。」「さばなにぞ。」ととふに　（91帽子叟与孔子問答事）

「然ラバ国ノ大臣カ。」……「然ラバ国ノ司カ。」……「然ラバ何人ゾ。」ト。　（今昔　巻10—10）

〈サラバ的文脈だとみられるもの三例〉

(2)「さば、いざ清水へ。」といひければ、（87清水寺二千度参詣者打入双六事）

「然バ、去来参テム。」ト云ヘバ、　（今昔　巻16—37）

(3)「さば、かならず帰りてこよ。……」といひければ
（185高階俊平ガ弟入道竿術事）

「然、必ズ返リ来レ。……」ト云ケレバ　（今昔　巻24―22）

(4)「御ぜんたち、さばいたくわらひ給てわび給なよ。……」　（同　右）

「御前達、然バ咲ヒ不給ジヤ。……」

〈サレバ的文脈だとみられるもの四例〉

(5)我身はさば観音にこそありけれ……と思ひて
（90信濃国筑摩湯ニ観音沐浴事）

我ガ身ハ然バ観音ニコソ有ナレ。……」ト云テ　（今昔　巻19―11）

(6)さば、この観音のせさせ給ふなりけりとおもふに
（109越前敦賀女観音助給事）

然バ……観音ノ変ジテ助ケ給ヒケル也ケリト思フニ　（今昔　巻16―7）

(7)さばこれよりほかにたぶべき物のなきにこそあんなれとおもふに
（131清水寺御帳給ル女事）

然バ此ヨリ外ニ可給キ物无キニコソ有レト思フニ　（今昔　巻16―30）

(8)さばこの翁の法師になるを随喜して……新仏のいでさせたまふとはあるにこそありけれ。
（136出家功徳事）

然……新キ仏出給フトハ道祖ニハ告ルニコソハ有ケレト思フニ　（今昔　巻19―12）

〈今昔に対応語のないもの四例〉

(9)我はさばのどかはきて絶入たりけるにこそ有けれ
（96長谷寺参詣男利生預事）

我ハ喉乾キテ既ニ絶入シタリケルニコソ有ケレ　（今昔　巻16―28）

(10)さば我は死たりけるにこそありけれと心えて
（103敏行朝臣事）

――相当部分なし――

(11)さばこれをきぬにしてきんとおもふ心つきぬ。（131清水寺御帳給ル女事）

着物ノ无キニ衣ニ縫テ着ト思ヒテ　（今昔　巻16―30）

(12)それをおもふに、経頼が力はさば百人斗が力をもたるにやとおぼゆるなり。
（74経頼蛇ニ逢事　結び）

此レヲ思フニ恒世ガ力ハ百人許ガ力ヲ持タリケルトナム思ユル。
（今昔　巻23―22）

なお、今昔と重ならない物語では、サラバ的用例が3・50・111に三例、サレバ的用例が33・83・84・124・178に五例あり、このうち五つは、すでに大納言物語かとみてきたものであり、具体的にはつぎのとおりである。

(13)「さば、たがしるべきぞ。」といへば　（111ツネマサガ郎等仏供養事）

(14)さば、入たらましかばみな数をつくして射ころされなましと思けるに
（33大太郎盗人事）

(15)さば、此僧にまことにぐしておはしたるにやとおぼす程に
（83山横河賀能地蔵事）

(16)さば、仏経は目出くたうとくおはします物なりけりと思て
（124海賊発心出家事）

(17)さば我子にこそありけれ……とあはれにおぼえて　（178魚養事）

さて、「さらば」ならば「然ラバ」、「されば」ならば「然レバ」と仮名を送ることが多い今昔で、(1)（書承とみられる異国物語）以外の「然バ・然」は、「サバ」の表記だったのではないかと思われるが、この「さば」は、他の平安期和文にも、

「さば、はや。」と（帝）おほせらる。　（夜の寝覚　巻四）

さば、これに養はれて有なりけりと（右大将）珍らかにおぼさる。
（宇津保　俊蔭）

などと、会話部分を中心に散見せられ、どちらかといえば公家層の口頭語的な用語だったようにみえる。ただ、大納言物語では、地下の

男女を主人公とする利生の物語にとりわけ片よって使われ、とくに(5)～(10)などのように、状況は今気づいてみるとなるほどこうだったのだなあと思う、といった文脈でのサレバ的用法に特徴が認められる。その場合、思う主体は当然物語中の主人公であるが、ただ一例、物語の結末部分で使われる(12)の例は、その「思ふ」主体が物語全体の語り手とみられる特異な例である。今昔重出のものでは、全般にわたりかなり同文度が高い物語であるにもかかわらず「さば」に相当する語はないが、いわば無意識の実感を追認識する意のこの語が、書承にあたりそのような部分で後に削られることはあっても、あえて付加される可能性はほとんどないだろう。

宇治拾遺中結末部分の述語主体が物語全体の語り手とみられる他の例は、さきに一章で大納言物語と認定した110・111の「――と(ぞ)聞きし。」だけであるが、(12)は相撲の物語でもあり、これらの語り手――「さば」と実感をこめて語った人が、隆国その人であったことは十分考えられる。そして、地下の人々の物語中に、同類の「さば」が多く使われるのは、文献や宮廷社会の語り伝えに制約されない、それら誰が語り始めたかも不明の物語においてこそ、むしろ隆国は、より自由に感情移入したみずからの語り口を展開しているということではないだろうか[17]――。

ところで、宇治拾遺物語中白眉の「かたり」としてよく注目される「133空入水シタル僧事」は、

○これも今は昔、桂川に身なげんずる聖とて、まづ祇陀林寺にて百日懺法おこなひければ、ちかき遠きものども道もさりあへず、おがみにゆきちがふ女房車などひまなし。みれば、卅余斗なる僧のほそやかなる、目をも人にみあはせずねぶり目にて時〳〵阿弥陀仏を申。そのはざまに脣ばかりはたらくは、念仏なんめりとみゆ。

と語り始められているが、この傍点部「みれば」は、誰が「みれば」なのか一向にわからない。物語中の人物が状況を「みれば」として筋が展開してゆく場合は、「5随求ダラニ籠額法師事・17修行者逢百鬼夜行事・124海賊発心出家事」などにあるが、このように主体不明の物語中の「みれば」は、他に見当らないようである。したがってこれは、さきに見た結末部分の「110・111聞きし」「177思ふに―おぼゆる」などと同様、この物語全体の語り手が「みれば」なのだと考えるしかないものだろう。しかもこの物語は、まさしくその見たままに、時の流れに沿いながら無駄なく緻密な描写が重ねられており、さいごに、

○はだかなる法師の、河原くだりに走を、つどひたる者どもうけとり〳〵打ければ、頭うちわられにけり。

とケリがつくまでは、「みれば」以降一度のケリも使わず、リ・タリおよび動詞の原型止めで、リアルにたたみかけるように歯切れよく語られている。

「かたる」という語が、コトを言葉でカタどるといった原義とみられるならば、これはそうした「カタる」行為そのものだろう。しかも、その状況全般への目くばりの広さや、僧の会話部分を中心に若干の漢語も交えた洗練された豊かな語彙の駆使からは、コトを伝えるためのカタリというよりは、カタリそのことにきわめて意欲的だった語り手の意識が伝わってもくる。また、群衆の「こち押しあち押し」するひしめきや口々のささめき、入水僧の「目をも人に見あはせず」大息ばかりする行為によって示す心理描写など、同じ写実性でも、絵巻などのそれとは拮抗する言葉独自の写実性でもある。このように終始一貫して、その実体をあらわにしない語り手自身の目から、現実を写実する語り口をもつ物語は、宇治拾遺中他に見られない。

これを、さきに大納言物語とみてきた根拠は、明瞭な起承転結構成と後日談の付加、そして右引用部分にある「ナンメリ」をもつというだけであるが（「な（ん）めり」と「とみゆ」または「とみる」で承けるものに限れば、他に四例のみ。18・33・120・161のいずれも大納言物語とみられるものに出る）いささかおぼつかないので、さらに今一つの徴表を挙げておこう。

〈結〉とみられる部分は、「とかくいふほどに、此聖……」と始まるが、宇治拾遺中「とかく言ふ」といった類の表現は他に七例あり、それぞれつぎのような表現をとっている。

とかくいふ程に　（27季通欲逢事事）
とかくいひける程に　（180珠ノ価無量事）
とかくの事もいはず　（94播磨守為家侍佐多事）
とかく申人もよも侍らじ　（97長谷寺参篭男預利生事）
大かたこれ程の事とかく仰らるゝに及ばず　（75同清仲事）
大かたとかくいふばかりなし　（129白川法皇北面受領ノ下リノマネノ事）
大かたとかく申に及ばず　（189門部府海賊射返ス事）

前四つは明らかな大納言物語、後三つはさきに用語等から推定した189も含め拾遺物語である。「空入水僧」における「とかくいふほどに」が、どちらの語りぐせに属するかは一目瞭然だろう。しかも、右の27・180および94は、隆国晩年に重なる時期に成立した「かたり」でもある。

源隆国は、この「空入水したる僧の事」だけは、他の伝聞による物語のように一切の想像的描写をせず、いわばルポルタージュとして、みずからの目で見た現実をすべてみずからの言葉で語り出したのではなかっただろうか――。

注

（1）未公表

（2）岩波古典大系『宇治拾遺物語』の説話目録では、78が78・79に二分、79～125の間で一つ後にずれ、126・127が127一つになる。ただし、陽明文庫本の目録も、大納言物語に対しては絶対的なものではない。

（3）清文堂『宇治拾遺物語総索引』を手がかりにした。ただし、同書は岩波古典大系本をもとにしており、またまれに誤脱がみられる。本文中の①②③④の用語については拾遺物語中に用例がないことだけを陽明文庫本で確認した。

（4）「サハ」の「ハ」が当時濁音だったかどうかはむずかしい問題であるが、四章でみるように、文脈からは「サラバ・サレバ」をはしよった口頭語だったかと推察される。辞書類にしばしば混同して挙げられる指示詞（サ）＋係助詞（ハ）の「サハ（ソレハの意）」とは別語であり、総索引三四六④の「151さはなんぞ」の例は、今昔「其レハ」・古本説話「そは」と対応していて、こちらの混入である。

（5）岩波大系本には、他に「これも昔」で始まる例が、3・72の二例ある。しかし、陽明文庫本等ではそれらはどちらも「これも今は昔」となっている。また、岩波大系本で「今は昔」となっている166は、陽明文庫本では「むかし」である。

（6）あとに続く言葉のあり方からみて「ヤーヤー」とのばして言っていたのではないか。

（7）個人的な文体の差なのか、ある程度それぞれの時代一般の語りの「型」なのかは一概にいえない。なお、二度の拾遺時に文献から書承されたものには、起承転結的なものもまじるとみられる。

（8）長野甞一「宇治大納言をめぐる」（日本文学研究資料叢書『今昔物語集』所収）

相撲の物語の登場人物は、今昔物語集に語られるところによれば、隆国二十代よりは以前の人物たちとみられる。

(9) 和田英松『官職要解』（明治書院）

(10) 今野達「善家秘記と真言伝所引散佚物語―今昔物語との関連において―」（日本文学研究資料叢書『説話文学』所収）に示された「106千手院僧正仙人ニ逢事」でも同様のようにみられる。

なお、143・144については、書承としてもある程度和文的なものからではないかと思われる。

(11) 省略の「云々」が137に二か所、138に一か所出る。宇治拾遺中では、他に「184御堂関白御犬晴明奇特事」に一か所だけ「云々」がみられる。これは古事談に重なるものがあるが、他の古事談類のような同一文献からの直接書承とみられるような重なり方ではない。184は書承である可能性はつよいが、それが大納言物語・第一次・第二次拾遺のどの時点でのものかを決めるのはむずかしい。

(12) 20・21・193については、すでに一章で大納言物語かとして挙げたものである。また134は、冒頭句は「昔」で起承転結構成である。なお「194仁戒上人往生事」は、仁戒の素性が今一つ不明であるが、内容的にはこれもまた同類とみられ、かつ「ナメリ・下人」をもつ。

(13) 「下臈」の語り手に仮托して公家上層部を語った『大鏡』の屈折と対極的である。

(14) 鳥羽僧正覚猷と国俊とは、尊卑分脈では兄弟（国俊が兄）になっている。情報の近さからみれば、拾遺物語のおじ（僧正）おい（国俊）の関係のほうが信頼できると思われる。

(15) 「かたり」について、かなり関心の異なる拾遺物語筆者が、大納言物語をみずからの関心で大幅に取捨選択して遺した可能性は考えにくい。ただ、拾遺物語の一つ一つは、大納言物語よりかなり短く、淡白な語り口好みだったらしい筆者が、大納言物語を、筆写過程で若干省筆した可能性はあるかもしれない。

(16) これまでみたところで数えると、宇治拾遺物語中の、大納言物語・拾遺物語・最終拾遺物語の数は、それぞれ順に、110+α・46+α・30+α あたりと推定できる。拾遺物語にも書承と口承があるとみられるが、実証的に判別する手がかりをえにくい。

(17) 宇治大納言物語から今昔物語への流れ方は、私は、読み上げられたものの丸暗記による口承を想像している。

(18) 平安期において、漢語は、えてして今使わないものほど、僧などにとっては日常口頭語化していたものだっただろう。書承の物語にしても、漢語が出るから文語的とは一概にいえないし、僧の物語には、あえてそれらしく漢語を交え残したことも考えられる。逆に無名の女の物語などには、書承かもしれない「30唐卒都婆ニ血付事」にさえ、一切の漢語を使わないからである。

The narrative and the spirit in Uji-Dainagon's Tales

Noriko KIMURA

Summary

Uji-Dainagon's Tales, which were scattered and lost, remain now in a part of Ujishūi Tales which overlap a part of Konjaku Tales and a few others.

Uji-Dainagon's Tales were not only gleaned from many people's narrations, as they were, but the Tales was marked by the strong individuality of Dainagon Minamoto-Takakuni. He was especially interested in various superhuman forces of soul and flesh that were unknown or not revealed.

His narratives let us know a certain type of free and generous spirit at the middle of the Heian period.